

日中両語における文脈指示詞に関する体系的な研究

陳, 海濤

<http://hdl.handle.net/2324/1831407>

出版情報：九州大学, 2017, 博士（芸術工学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）



氏 名	チェン ハイ トウ 陳 海 涛		
論 文 名	日中両語における文脈指示詞に関する体系的研究		
論文調査委員	主 査	九州大学	教授 板橋義三
	副 査	九州大学	教授 矢向正人
	副 査	九州大学大学院言語文化研究院	教授 西山猛

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

従来、日本語と中国語の両言語における指示詞の文脈指示用法は現場指示用法と同様に純粋に記述言語学的アプローチを用いて行われてきた。しかしながら、近年は認知科学の学問的発達により認知言語学的アプローチが用いられるようになってきており、本研究は最先端の言語学的アプローチを使用し、さらに日中両語を比較対照することにより、更なる異同を認知的側面から浮き彫りにし、解明に至らしめた画期的、かつ体系的な博士研究論文である。

第一章では、日中両言語の指示詞に関する先行研究を概観し、その問題点を明らかにし、本論で考える指示詞の位置づけを行った。現場指示用法の区別は「遠近」による認識の違いであることを述べ、その認識を基盤にして系列の文脈指示用法の位置づけを行った。第二章は研究の目的と方法について述べ、続いて第三章では一般的に指示詞の分類とその機能について述べた。

第四章は日本語の文脈指示詞用法に関して、先行研究では解釈不能な例文などを中心に考察を行った。文脈指示用法の背後にある話し手の認知メカニズムに焦点を当て、コ・ソ・アの3系列の指示用法を包括的に考察した。第五章では中国語の文脈指示用法について、“这”の現場指示用法は話し手に物理的に「近い」ものを指し、“那”の現場指示用法は話し手に物理的に「遠い」ものを指すという従来の認識の下に、その用法から文脈指示用法に拡張していることを推測しその断片を突き止めている。

第六章は日中両語のフィラーに関して、理論的、実証的に考察を行った結果、文脈指示用法の文法化により指示詞から拡張したことが分かった。第七章において、日中両言語の文脈指示用法における共通のモデル構築を包括的に行い、文脈指示用法の区別を初めて明らかにした。終章の結論では日中両言語の文脈指示用法に関する原理と体系について整理し、体系化したものを提案した。

本論文では日中両言語の文脈指示用法のメカニズムを解明し、文脈指示詞の用法の理論をより確実なものへと導き、実証的な論拠を示しつつ、両言語の文脈指示詞の体系をほぼ確立したと言える。よって、本論文は博士（芸術工学（甲））の学位論文に値すると論文調査員全員が判断した。